

依頼論文

日本補綴歯科学会第123回学術大会／臨床リレーセッション2
「サルコペニアの予防と改善に寄与する補綴歯科を目指して
—多職種連携による高齢者の口腔機能、栄養、運動機能の改善—」

サルコペニアの予防と改善に寄与する補綴歯科を目指して
—多職種連携による高齢者の口腔機能、栄養、運動機能の改善—

松山美和

The prosthodontic strategy for the prevention and improvement of Sarcopenia

Miwa Matsuyama DDS, PhD

昨今、高齢者の身体的問題のひとつとしてサルコペニアが話題になっており、マスコミなどからも多数、情報発信されている。欧州関連学会のコンセンサスによれば、サルコペニアとは筋肉量の低下と筋肉機能（筋力または身体能力）の低下があわせて存在することを指し、高齢者の移動能力や身体障害、高額な医療費、そして死亡率などに影響すると考えられている。若干の定義は異なるが、その有病率は60～70歳で5～13%、80歳超では11～50%と報告されている¹⁾。さらに、サルコペニアの自然経過の定義と効果的な治療法の開発を目標として、以下の3つの課題が提示されている¹⁾。

- 加齢に関するサルコペニアの予防と治療における栄養摂取の役割とは何か？
- 高齢者のサルコペニアの予防と治療において、運動の役割とは何か？
- サルコペニアの治療のために十分な証拠に基づく裏付けのある、特定の薬剤はあるのか？

欧州関連学会は栄養学系と老年医学系から組織されており、サルコペニアの予防と治療における栄養摂取や運動の役割の明確化が奨励されている。しかし残念ながら、歯科の役割については全く触れられておらず、歯科による口腔機能の維持・管理という観点が見落している。超高齢社会の日本の歯科であるからこそ、「高齢者のサルコペニアの予防と治療における歯科の役割は何か？」という課題を追加発信し、解決すべきと考える（図1）。課題解決のために必要な疫学研究や臨床研究は何か、多職種連携からどのような成果が得られるか、科学的データに基づいた情報をどのように歯科

から発信すべきか、などの点について、さらに熟考すべきだろう。

われわれ日本補綴歯科学会は、「補綴歯科による国民の健康長寿への貢献」を目標の一つに掲げており、補綴歯科治療を含めた包括的口腔のケアは、口腔機能、とくに「食べる」機能の維持・改善により栄養改善や運動機能の維持・改善へとつながり、サルコペニアの予防や改善に寄与する可能性は大きいと考える。そこで、平成26年5月に仙台市にて開催された第123回学術大会において、「サルコペニアの予防と改善に寄与する補綴歯科を目指して—多職種連携による高齢者の口腔機能、栄養、運動機能の改善—」と題して臨床リレーセッションを企画・開催した。このセッションでは医師、管理栄養士、歯科衛生士と歯科医師の各講師から、サルコペニアの現状とアプローチについてご講演いただき、さらに多職種間討議では「サルコペニアの予防と改善に対する補綴歯科からの貢献」の可能性について、科学的裏付けとしての疫学調査や臨床研究の必要性を含めて検討した。そして、セッション最後には、補綴歯科が超高齢社会におけるサルコペニアの予防と改善に貢献できる新たな目標と具体的方策として、以下を提言した。

- 臨床における医科・歯科・栄養はじめ多職種連携の強化
- 医科側の歯科口腔系への認識の底上げ
- 他医療職種に対する「口腔機能改善」に関する情報発信
- 連携のキーパーソンとしての歯科衛生士の活用
- 機能低下が顕在化する前からの介入

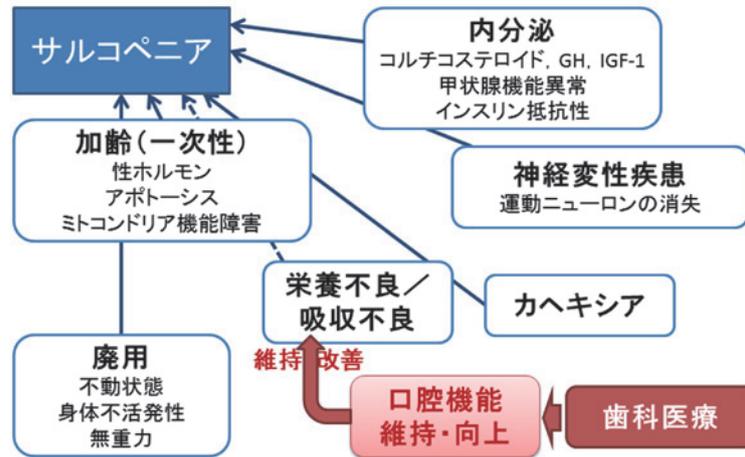


図1 歯科によるサルコペニアの予防・改善(サルコペニアのメカニズム¹⁾より改変)

- 国民に対して、わかりやすい言葉での「口腔虚弱」に関する情報発信
- 「口腔リテラシー」の向上に向けた国民運動論
- 研究も多職種協働, 情報を科学的に裏付けるためのコホート研究, そして学会におけるガイドライン作成

本特集では、このセッションの4名の講師に講演内容を基にして、各専門医療職の立場からテーマに関するご意見を総説として執筆いただいた。飯島勝矢先生(東京大)には、高齢者の食の安定を意味する『食力(しょくりき)』の向上のため、医科歯科協働による口腔機能低下に対する早期介入の必要性について著述いただいた。菊谷武先生(日歯大)は、高齢者の「食」支援として歯科が栄養改善を目標とし、高齢者に多い運動障害性咀嚼障害にどのように関わるかが今後の課題と問題提起された。中村育子先生(福岡クリニック在宅部)は管理栄養士として、在宅訪問栄養指導と在宅における栄養と歯科との連携の実際をご紹介いただき、両者の連携が患者本人の目指す生活を可能にすることができるとまとめられた。金久弥生先生(九歯大)は、歯科衛生士は多職種連携の中で高齢者の「食べられる口を護り、創る」役割を担い、歯科診療室と地域をつなぐ役割を果たし、また、医学的視点とケア的視点を備えて両者をつなぎコーディネートできると記された。

さらに、以上の4編に対して中島八十一先生(国立

障害者リハビリテーションセンター)と小西美智子先生(広島大学)から書評をいただいた。中島先生の読後感として、この特集で示されたことを全国的にどう普及させるかが課題の一つであろうと問題提起いただき、小西先生からは、看護師も咀嚼障害のレベルと対策を理解して口腔環境保持及び栄養摂取支援ができるように、歯科医師及び歯科衛生士との連携を深める必要があると感想を著述された。

第123回学術大会の臨床リレーセッションでの講演および討論にとどまらず、学会誌に特集としてまとめさせていただくことで、会員読者の方々の、高齢者におけるサルコペニアの重要性に関する認識が高まり、サルコペニアの発生予防あるいは遅延に対する歯科の貢献を熟考する良い機会となれば、セッションを企画・コーディネートした座長としてたいへん喜ばしい。最後になったが、この特集を組んでいただいた編集委員会に深謝致したい。

文 献

- 1) 厚生労働科学研究補助金(長寿科学総合研究事業)高齢者における加齢性筋肉減弱現象(サルコペニア)に関する予防対策確立のための包括的研究 研究班, サルコペニア:定義と診断に関する欧州関連学会のコンセンサス ー高齢者のサルコペニアに関する欧州ワーキンググループの報告ー の監訳, 日老医誌 2012; 49: 788-805